

# 平成 29 年度 栃木県浙江省友好交流員レポート(2月)

## 2月の杭州にて

時が過ぎるのは早く、この2月で交流員としての中国での滞在が終わります。中国浙江省杭州市に来た際は、半年という期間が長いのか短いかわからなかったのですが、気づけばもう2月。今となってはとても短かったと思います。しかしそれだけ色々なことが体験できて内容が濃い交流員生活だったと思います。この機会を私に授けてくれた栃木県、浙江省、そして私を支えてくれた方々への感謝しか今はありません。

さて、このレポートではこの2月の出来事とこの交流員生活の総括をしていきたいと思っています。まず、2月の出来事としては日帰りでの紹興市の旅行、浙江省内の研修旅行のことを、そして総括としては中国生活で感じたことを綴っていききたいと思います。

## 魯迅所縁の紹興市

紹興市は私が住んでいた小山市とも友好都市関係を結んでいる都市でもあり1度は行っておきたい場所でした。紹興市といわれ初めに思いつくことは紹興酒でしょうか、または魯迅の所縁の土地でしょうか。魯迅は日本でも有名です。紹興市がその所縁の場所という知識がなかった私としては紹興酒のイメージが強かったのですが、魯迅の故居や記念館があるなど魯迅所縁の土地として賑わっていました。『魯迅故里』、この場所には先ほどの故居や記念館など魯迅関連の建物が集まっていました。中国の観光地は1つの場所と場所がとにかく離れており、観光が大変だったりするのですが、ここ紹興市は比較的近場に観光地が集まっており観光もしやすい土地としてお勧めもできます。

まず、故居では魯迅が住んでいた場所として魯迅の部屋、魯迅の家族の部屋、台所、客間などの展示がされていました。家自体は昔の中国の家という感じで特別なものは感じませんでした。魯迅の故居として残っていることを考えると特別な人であると強く感じました。記念館も近くに併設されているので記念館も観覧しました。魯迅の生い立ちから最後までの流れを大まかに掲載されておりました。その中で中国人にとって魯迅がどれほどの偉大な人物だったのかを感じました。日本人である私すら知っているのですから当然なのでしょうが、魯迅が亡くなった後も、魯迅の生後を祝う大会が開かれていることを知り中国人にとっての魯迅の偉大さを更に感じました。日本への留学で藤野巖九朗先生との出会い、日本の文化に影響を受けた魯迅の兄弟の話など歴史の授業だけでは見ることのできない資料の数々でした。そして、各国で翻訳された魯迅の書籍も数多く展示されており、魯迅が世界

的にも偉大であったことがわかりました。そして、魯迅故里の隣には沈氏園という庭園もあります。私が庭園を訪れた時は雪が降っていてとても寒い中観覧したのですが、雪の積もる光景はなかなか幻想的で寒さの中を耐えて回った甲斐がありました。中国の庭園と日本の庭園の造りはやはり似ているように感じました。建物の色使いは中国がやや派手に感じましたが、庭園の中の造りは似ていると私なりに感じ、日本が中国からの影響を受けていたのだと感じる一場面でした。倉橋直街という商店街があったのでここで紹興酒を買おうかと思立ち寄りしました。しかし、いざ探してみると紹興酒という看板が見つからなく一人あたふたしてしまいました。その後、酒屋の店主の方に聞いて知ったのですが、地元では紹興酒というより黄色い酒と書いて黄酒というそうです。紹興酒といっても種類が多く結婚式に使うものや普段飲むための物など色々あると、そんな店主の方の説明を聞きながら紹興酒を買い日帰り紹興旅行の帰路に着きました。

## 浙江省内研修旅行

この旅行は浙江省政府の方々に企画していただいた旅行でした。今回は5日に分けて金華市の東陽市、義烏市、蘭溪市そして麗水市の蓮都区、景寧市、龍泉市を観光しました。まず東陽市にある横店影視城という映画やドラマの撮影でよく使われる場所を訪れました。とても大きな場所でここでも中国のスケールの大きさに驚かされました。敷地内では昔の中国の建物の再現がされており、日本でいうところの京都にある太秦映画村といった感じでしょうか。撮影中だった場所もあり撮影現場を観た際は、昔の中国の様子を垣間見たようでした。明清時代の城などの再現された場所もありとても見ごたえのある場所でした。

次に、義烏市の国際商貿城を訪れました。この場所は世界各国から数多くの貿易商人が訪れる場所として有名な場所です。訪れた時期が中国の春節が近かったということで多くの店の従業員が帰省し閉店している状況でした。建物内は多少静かだった印象ですが、本来ここでは毎日商談の話がまとめられていると聞き、現場を是非一度見てみたいと思いました。今回は縁がなく中を観覧するに留まりました。中では本当に色々な物が売られており電子機器から日常雑貨、装飾品に使う細々したものまで多岐にわたりました。ちらほらと交渉している外国の方の姿も見かけながら中国で最も大きな取引現場の舞台となる場所を目の当たりにしました。

金華市には諸葛亮孔明の子孫が住んでいるとされる村があります。その名も諸葛八卦村です。ここでは今でも諸葛姓の方が多く住んでいる場所として有名な場所です。諸葛家の家

系図からの伝記、諸葛亮孔明に関わった人物の紹介などがされていました。日が沈む際に村を訪れたので辺りは少し薄暗かったですが、村の雰囲気と相まってとても美しい景色を醸し出していました。

次に、金華市から場所を移して麗水市を訪れました。まず向かった場所は蓮都区にある麗水市博物館でした。博物館は入って真っ先に目に入る銅像がとても印象的でした。麗江市の発展に貢献した人々の様子が描かれた像だったのですが、とてつもなく大きく博物館に入っただけで圧倒されてしまいました。博物館の中は麗水市の歴史、自然、特産物などの説明がされていました。特に私が気になったのは棚田の景色の紹介です。今回は日程に入っておらず行けませんでした。麗水の棚田も観光地として有名です。次に麗水市を訪れる際は是非寄りたいたいと思いつつながら棚田の説明を観ていました。この他に今回の旅行で訪れる堤、少数民族の畚族(シャオ族)、青磁、刀剣の紹介などを観ました。

次に古堰画乡(グーイェンファァーシャン)という場所を訪れました。ここでは博物館で観た堤を間近で観ることができました。堤を間近で目の当たりにして、やはり先人の知恵や努力というものはどこにいても計り知れないものがあるなど感じました。ここを訪れた際も夕暮れ時で夕日が水面で反射して川がキラキラと輝くさまが観られとてもきれいでした。遊覧船に乗ることもでき、楽しいひと時を過ごすことができました。

場所を移動して景寧市の畚族の自治区に行き畚族の結婚式を体験できるということで参加しました。私は新婦の兄という役で参加しました。ほかの交流員の男性は皆参加して体験しました。やはり世間的に行われている結婚式とは何もかも違い、滅多に体験できない貴重な体験をしました。中国の一般的な結婚式の様子もまだ見ていないので、機会があれば見てみたいと思いました。結婚式後は畚族博物館に行き畚族風土などを麗水市博物館よりも詳しく掲示してありました。中国には56の少数民族がおり、またそれぞれで風習が変わると聞きます。今回をきっかけに他の少数民族の風土など見てみたいと思いました。漢族や苗族(ミャオ族)など色々な民族の風土にも触れて中国国内でも違いを探してみたいと思いました。

中国といえば青磁のイメージがある方もいることと思います。ここ浙江省龍泉市は盛んに作られている場所の1つでもあります。そして今回は青瓷小镇(チンツウシャオジェン)という青磁の作業工程の見学や青磁を作る体験ができる場所に行きました。日本にもたくさん焼き物があるように中国にも各地に焼き物があります。ここでは少しではありましたが他の地域の焼き物を観ることができました。様々な形や色合いがあり栃木県の焼き物

に似ている雰囲気焼き物もあるなど、やはり中国と日本は近い文化もあるのだと再確認しました。色々と青磁を観覧し青磁の焼き上がり後の色合いがとても美しいなど見終わった最後に思いました。最後に青磁の成形の体験ができる場所に寄って体験しました。どうも私は才能がなかったようで上手く成形できず時間もなかったのので後には諦めてしまいました。次にまた体験する時があれば次こそはと思いつつながら**青瓷小镇**を離れました。

龍泉市は刀剣製作も有名でこれも龍泉市で作られています。龍泉宝剣庵という場所で飾られている刀剣を観ることができると聞き訪れました。歴史的な刀剣があるということではなく今も継続して作られている場所なので購入できる刀剣が並んでいました。刀剣を持たせてもらいましたがあまりに重く、これを持ち戦に繰り返し参戦していた昔の人はとても疲れただろうなとふと思ってしまいました。

その後は**青瓷师园**(チンツウシュユエン)という日本でいう人間国宝のような人が住む家が近くにあり観覧が可能だということで伺わせてもらいました。国に認められているこの方は国から住まいを提供されているということでした。国からの手厚い助力にとっても驚きました。家の中はショーケースが並び、中に作品が飾られていました。値段は一つ桁を間違えたのではないかと思うような値段の青磁が並んでいました。今回残念ながら国に認められた青磁を作る方にはお会いできませんでしたが、その親族の方に案内をしていただきお茶も振る舞っていただきました。出されたお茶に使われている湯飲みも青磁、まさかと思いい値段を聞いてみるととんでもない値段でした。少し湯飲みを持つにも緊張してしまいましたが、振る舞われたお茶は美味しく少し落ち着くことができました。案内された方と別れる際も写真を撮ろうという話が出たのですがその方が「またここに来れば写真は撮る必要ないよ。」とおっしゃり、撮ることはなかったのですが、こういった中国の方の言葉はとても私の好きなところでもあります。最後に中国の人と人との繋がり方に触れ杭州へと帰りました。

## この中国生活での半年

半年という期間はとても短い期間でした。中国語の能力を上げるのは勿論のこと、中国内旅行、中国でできた友達と過ごす時間、本当に時間が足りませんでした。しかし、短いと思えたのは単純に時間が短かったのではなく、充実した時間が過ごせたからではないかと思っています。やはり海外に住むことはとても特別なことで、とても苦勞すると同時に、とても楽しいことだと思います。日本には得られない経験をたくさんすることができました。食べ物注文をする際に自分の話す言葉が通じるかという恐怖感、路上で突然道を尋ねられ答えられず申し訳なくなる気持ち、学校の授業中に説明されている言葉の意味が分からず何を聞けば自分の欲しい答えが聞けるのか分からない孤独な気持ち、本当に色々ありました。これらは一部で毎日何か似ているようで違うことを感じながら生活していました。この体験は言葉が通じてしまう日本では味わえなかったものだと思います。そして一人、海外に来たことで感じたものだと思います。言葉の壁というのはとても大きなものだと改めて勉強してみて感じました。それでもただの苦難だったと私は思いませんでした。それは偏に中国語でしゃべることが楽しかったからに他ならないと思います。中国に来た当初、私がしゃべる中国語では通じないと思っていたので、なかなか宿舎から出られなかった時期もありました。しかし、私はその気持ちをバネにできたと思います。しゃべれないならとにかくがむしゃらに勉強してしゃべることができるようになろうと思えました。私は幸いにも身近に助けてくれる人もいました。時には中国語の勉強自体が辛くなかなかやる気の出ない時期もありました。それでも続けてこられたのは少しずつでも自分の中国語能力が上がってきたことが感じ取れるようになってきたからだだと思います。今の私の中国語のレベルではまだまだ会話を成立させるには足りません。しかし、会話する相手からの助けもあり、外国の人と話すことの楽しさというものを理解できました。日本語ではなく外国語で外国人と話すことの楽しさは他に形容しがたい面白さがあると思います。この半年間苦しくもありましたが、それを含めてもとても充実していたと思えるのです。海外に来て自分から動かなければ何も始まらないととても痛感しました。これは単純に中国語でしゃべることだけではなく人間関係の構築さえもそう思えました。ここに来た際は言葉の壁というものを意識しすぎて消極的であったなと思います。そのため中国に来た当初は日本人同士で言葉の通じる相手に頼り切っていたと反省しているところです。自信というものは大切で何をやるにも必要です。しかし、それを持つのも簡単にはできません、日々の努力の賜物とはまさにその通りだと思います。今の私は半年ずっと中国語を勉強して少しでもしゃべることが

できるようになったものが土台となり、今自信のようなものを持てたと思います。私は自信を持つのに少し時間をかけてしまったのかもしれませんが。この中国での生活で気付くことができたことは、チャレンジして失敗をしても諦めず成功できると信じてやり続ける気持ち、これが自信だということです。当たり前ですが、私はこのことに気付かずに今まで過ごしていたような気がします。この体験で気づけたことを生かして帰国後は積極的な姿勢で何事にも取り組みたいと思っています。また、中国語の勉強は継続し、もっとしゃべることができるようになりたいと強く思い、今後は中国と日本の両方で何か関われる仕事をしていきたいと思っています。これにて私の交流員生活の報告を終わりたいと思います。半年間お付き合いいただきありがとうございました。

浙江省交流員

加治屋樹